

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE

GAKUEN DAYORI



26 OCTOBER 2006

No.145

小樽商科大学

学園だより

地域貢献活動
商大は地域に何が
できるのか

緑丘祭・緑宵祭

課外活動／国際交流





Gakuen Dayori

学園だより

題字は 秋山 義昭 学長

No.145 26 OCTOBER 2006

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE



CONTENTS

地域貢献活動

商大は地域に何ができるのか

- ①商大剣道部の地域交流稽古2
- ②今年も一日教授会を開催3
- ③潮まつりのねりこみに参加3
- ④「インターネット子ども教室 in 商大」を開催4
- ⑤公開講座を開講しています4
- ⑥「小樽緑丘」原料米の田植えに参加5
- ⑦商大生がカフェを経営5
- ⑧おたる運河ロードレースに
本学学生、教職員、OBが参加しました6

保健管理センターだより

- ヘルシーライフジャーナル9

緑丘祭・緑宵祭10

課外活動

- 平成18年度サークル加入状況・学生団体一覧12
- サークル活動紹介
プレクトラム・アンサンブル/水泳部13

国際交流

- 留学生から見た日本・日本でのヨハンナ14

新任教員紹介

- 藤生 源子（経済学科）18
- 田中 幹大（商学科）18
- 石井 利昌（社会情報学科）18
- ニール・クライマー（商学科）19
- マーク・ホルスト（言語センター）19

商大掲示板

- 平成18年度 学生論文賞の募集20
- 小樽商科大学グリーンヒル(学生支援)プロジェクト ...20

写真でみる小樽高商・商大小史 ⑫21

地域貢献活動

商大は地域に何ができるのか。

商大は小樽高商の時代から数え、今年で95周年を迎えます。その間、様々な形で地域と関わり、街に支えられてここまで歩んできました。今回は、商大が地域とどのように関わり、何ができるのか、特集してお届けします。

1 商大剣道部の地域交流稽古



剣道部主将 金濱 有志



現在、小樽商科大学剣道部は小樽剣道連盟や、市内および札幌在住の本学同窓生の方々のご協力を得て、毎週月曜日（19：00～）、土曜日（10：30～）に小中学生の指導、高校生以上の方々と合同稽古を行っています。この稽古の目的は、さまざまな方々との稽古や子供たちを指導することを通じて、商大生の技量をあげることはもちろん、地域との交流を深めることにあります。

この稽古会の発端は、昨年10月に開催された「小樽商科大学一日教授会」でした。その中で市民から「学生と小樽市民・企業との交流を図ってはどうか。」との要望があり、剣道に携わるものとして、私自身、何ができるかと考えました。帰りがけに、剣道部世話・相談役として日ごろからご指導いただいている就職課長の高橋静次先生とお話する機会を得て、やはり「剣道を通じて市民との交流を深めることはできないだろうか。」ということが話題になりました。その後、部員とミーティングを重ねて今年3月の武道場落成を契機に「地域交流稽古」を始めることになりました。

しかし、ここまで順風満帆にきたわけではありません。自分たちの稽古時間を十分に使えなくなる、学校の授業が忙しいなどの理由で部員の参加はあまり多くなく、また、小・中学生に指導しなければならないのに、剣道の勉強不足で自分たちだけでは満足に指導することもできませんでした。そんな中、高橋先生がお忙しいにもかかわらず毎回稽古に参加されて、小中学生への指導や稽古をつけていただき、私自身、この数ヶ月の間に多くのことを勉強することができました。また、指導することを通じて己の欠点も見えてきましたし、剣道を通じて新たな方々とも交流することができました。

現在、市内各道場の小中学生剣士が、夏休みに入っても元気に暑中稽古に通っており、遠く銭函から毎回欠かさず稽古に励んでいる双子剣士もおります。彼らの中から、将来商大生剣士が誕生するかもしれません。

私は剣道というものは単に試合で勝つことを目標とするのではなく、日々の稽古の継続や試合勝負を通じて剣道の力をつけること、そして人として心を強くすることができるものだと思います。今後もこの「地域交流稽古」を継続して商大生が多くのことを学び、剣道を通じて地域と交流を持続するために、日々精進していこうと思います。

2 今年も一日教授会を開催



▲過去の一日教授会での発言の様子

商大では毎年、市民との意見交換会「一日教授会」を行っています。第5回目の今年は、「街の振興と活性化-おたるの元気を取り戻せ!」をテーマに開催します。学長・副学長をはじめ大学関係者が出席し、小樽の活気を取り戻すために商大が何をすべきかを市民の方々と膝を交えて意見交換を行います。今年も昨年と同じテーマで、昨年寄せられたご意見やご提言をもとに、商大からの提案をお示ししてご意見を伺う場にしたいと考えています。昨年の一日教授会から、今年は剣道部の有志による地域貢献活動が生まれました。着実に街と大学をつなぐ掛け橋になってきています。



▲過去5回の一日教授会ポスター

3 潮まつりのねりこみに参加

7月29日(土)、小樽最大の祭りである「小樽潮まつり」のイベントの一つ「潮ねりこみ」に参加しました。本学の参加は今回で16回目となります。ねりこみは秋山学長を先頭に、教職員、学生、留学生を併せ総勢80名以上で繰り出し、およそ1時間半にわたり小樽市内の繁華街約2キロの道のりを練り歩きました。

踊りは、威勢のよいかけ声に合わせ大いに盛り上がり、見物客からも大きな声援が送られました。また、同時に本学のオリジナルうちわを沿道の市民の方々に配付し、地域に根ざした大学の姿をアピールする良い機会となりました。



▲オリジナルのうちわを手に、祭りに参加しました



▲国際色豊かな本学のねりこみ隊

4 「インターネット子ども教室 in 商大」を開催

8月25日（金）から9月11日（月）の毎週月曜日、金曜日（計6回）に、情報処理センターにおいて、「文部科学省地域子ども教室推進事業」の一環として、子どもメディアフォーラム「インターネット子ども教室 in 商大」を開催しました。

この教室は、本学の学生たちが、小学生にインターネットの安全な使い方を教えるもので、小学校3年生から5年生までの計13名が参加し、ホームページ、電子掲示板、チャットルームなどの多様な分野にわたって、インターネットの楽しさ、便利さと共に危険性を学びました。

最終日には、参加者全員に修了証書が授与されました。

参加した小学生は、インターネットについて熱心に質問し、これからも安全に楽しくインターネットを活用していきたいとのことでした。



▲商大生からコンピュータの使い方を教わる子どもたち

5 公開講座を開講しています



▲高校生のための夏期連続講義



▲通常授業公開講座

地域の支援によって生まれ、地域と共に発展する小樽商科大学は、開学以来90年以上にわたる教育研究の成果を、地域に還元すべく努力を続けてきました。それは、単なる知識の伝授にとどまらず、地域の人々との交流・連携という、刺激的で創造的な体験でした。異なった文化や考え方と出会いがあり、そこから新たな価値が生まれ、地域社会の活性化がもたらされました。公開講座は、そのような取組の一つです。

本学の公開講座が最初に開講されたのは、昭和35年のことです。とくに、社会・地域との関わりが重要視されるようになった最近10年間は、語学やスポーツの講座、テーマ別講座、室蘭工業大学との合同公開講座、市町村に出かけて行う出前講座、札幌・小樽での高校生を対象とした講座など、様々な試みを行ってきました。

また、夜間主コースの講義を一般市民に開放する講座（「通常授業公開講座」）も始めました。この講座の特徴は、受講者が、多様な内容の授業を、それぞれの関心に応じて聴講できることにあります。学ぶことに喜びを覚え、意欲をもつ人であれば、誰でも参加することができます。

6 「小樽緑丘」原料米の田植えに参加

アントレプレナーシップ専攻の相内俊一教授とその呼びかけに応じて集まった学生6名らにより6月9日、仁木町の紅果園において、今年3月に発表された小樽商大の日本酒「小樽緑丘」に用いられる酒米「彗星」の苗の田植えが行われました。この田植えは、米（酒）の生産・消費過程に関わることにより日本の農業問題を考える足がかりを作ると共に、農作業の体験を通して普段意識の中になかった農業を認識してもらい、また、自分の植えた苗が酒となる喜びを知ってもらおうとの意図の下に企画されました。

当日はあいにくの曇天でしたが、参加した学生ら（田植え未経験者がほとんど）は農園主である寒河江仁氏の指導の下、歓声をあげながら苗を手植えし、その成果は、寒河江氏によれば上出来だとのことでした。

学生の感想は「面白かった」、「泥の感触が気持ちよかった」と好評でした。

そして、「収穫期には稲刈りに来たい」との声も聞かれていましたが、10月6日、6月に植えた稲の刈り取り作業を行いました。深まる秋に同園に植えた稲が成長し、見事な稲穂をつけ、秋山学長と学生たちが稲刈り作業を体験しました。

今後は、自ら刈り取った稲で日本酒が出来るまでの製造過程を体験するため、酒の仕込みなども行う予定です。



▶6月に植えた苗が、こんなに大きく実りました



7 商大生がカフェを経営

社会情報学科木村泰知助教授のゼミの3年生が、色内の旧安田銀行ビルの隣に、9月1日カフェバー「Café Project」を開きました。お店のコンセプトは、「商大と小樽市民の交流の場として利用してもらいたい。ゆっくり長い時間をかけておしゃべりを楽しんでもらえる店」だそうです。

卒業後、店舗経営を考えているという社会人学生がゼミ生に呼び掛け、今年5月からプロジェクトチームを発足させ、スタートしました。「学生だからと甘えず、利益を上げたい」と長期経営を目指しています。

オープンまでの準備期間は4ヵ月間。自分達で資本金を用意し、飲食店の営業に必要な「食品衛生責任者」の資格も取得。カウンターやテーブルなど、28席ある店舗はゼミ生が調理、接客、値段設定などすべてを切り盛りしています。メニューはパスタなど約20種類、カクテルなどの飲み物が約40種類。各自が得意分野を生かして各部門を担当しています。

また、店舗入り口近くには「情報ブース」も設置。掲示板に商大で行われる演奏会や講演会などの情報を張り出し、市民と商大をつなぐ役割をねらっているそうです。

小樽高商時代からの伝統である、実学重視の精神を受け継ぎ、これまで学んできた知識を実際の経営に活かしながら、本物の力に変えようとしています。



▲「カフェプロジェクト」を運営する木村ゼミの学生

おたる運河ロードレースに 本学学生,教職員,OBが参加しました

小樽運河周辺をコースとするマラソン「第8回おたる運河ロードレース」が6月18日開催され、本学からも、商大をアピールし、地域社会とのつながりを強めようとの主旨で、「小樽商科大学グリーンヒル（学生支援）プロジェクト」からの援助により、おそろいのユニフォームで、学生、教職員、さらにOBの方も選手として出場しました。ここでは、選手として出場した方に、その思いを語っていただきます。



「大先輩と触れ合い、 商大の歴史を発見できました」



経済学科3年 中島 啓

この度の「第18回小樽運河ロードレース」に参加した和田良介ゼミの中島啓です。ロードレースへの参加は、ゼミの先生に勧められたことがきっかけで、私自身、日ごろの運動不足を見直す良いチャンスだと思い、友人を

誘って参加しました。参加を決めてからは、友人と走る機会を増やし、そして、大学側がユニフォームを用意してくれるとのことだったので、がんばろうという熱意も増しました。

参加者は私たち一般学生のほかに、留学生や先生に、小樽商科大学のOBの方たちで、また、写真部が大会風景を撮影に来てくれました。大会の規模は予想以上に大きなもので、道内だけではなく、本州からの参加者もいて、小学生から初老の方までと年齢層も広く、これ程のにぎわいになるとは思いませんでした。

また、いままで普通に学校生活や部活動をおくっていても、商大のOBの方と話す機会はなかったのですが、ロードレースに参加することによって、初めてOBの方と話す機会を得ることができ、そして、今まで意識してこなかった、小樽商大の歴史を発見しました。実に年齢が40歳以上も離れている大先輩の方と話す機会はそうはないと思います。

学校もロードレースの参加に協力的で、小樽商大を卒業した大先輩の話を聞けるよい機会なので皆さんも参加してみてはいかがでしょうか。

「小樽運河ロードレースは地域連携活動」

経済学科助教授 和田 良介

あなたは21キロ以上走れるか。私が商大に赴任した年、小樽運河ロードレースにはハーフマラソンではなく、20キロがありました。やってみたら完走できました。小樽運河ロードレースにはハーフマラソンの他に、5キロや10キロの種目もあります。目標が完走でも入賞でも同じように参加できます。仮装して走る人もいます。目立ちたがり屋には数十分間沿道の笑いを取って回れる機会です。このマラソン大会は商大生にとって自分の目標達成の機会であるとともに、地域社会に多少なりとも役立つ機会でもあると思います。この6月には12人が商大のユニホームを着て走りました。このユニホームは緑丘会から頂いた予算で新調されました。学生の地域社会との連携活動を支援するためのものです。来年はあなたもどれかの種目に挑戦してみませんか。

「皆に呼びかけて、来年のロードレースは現役とOBで一杯にしようや。」2004年9月、緑丘会駅伝チームの打ち上げの席でOBの方が提案したのです。「日頃、運動やってる連中なら、がんばりゃなんとか10キロは走れる。」「95周年には旗を持って走らせよう。」この度の地域連携活動の始まりでした。それまで、私は商大生に参加を呼びかけることなど考えてもみませんでした。大学の構成員の数と年齢構成からすれば、地元のスポーツ大会に多数参加することで地域社会に協力することは難しくありません。一方、スポーツ大会に参加する者にとっては、楽しめばお祭りとなり得ます。そうだ、小樽のマラソン大会は商大生とOBが集う行事になれるのだ。ホームカミング・デーも兼ねた誰でも参加できるスポーツ参加型のお祭りだ。四季折々、お祭りがあれば学園生活はより楽しい。受験を考える高校生にもそう見えるだろう。「緑丘祭」、「潮祭り」、学生会館前の「雪灯りの路」に続いて、「国際交流週間」ともうひとつ。商大生に小樽運河ロードレース参加を呼びかけよう。こう考えて私は翌年4月に和田副学長にOBのアイデアを持って行きました。しかし、準備が間に合わず。

備が間に合わず。

2006年4月。参加者募集のポスターが学内に掲示されました。いよいよ6月18日（日）。和田副学長と学務課長の石ヶ森さんが商大の旗を持って応援に来てくれました。小樽商大の名前を付けて走ったのは12人。OB4人、学生5人、留学生の母親1人、教員2人です。写真部3人と和田良介ゼミ4年生1人が撮影してくれました。この日、応援も含めれば短期留学プログラム学生のお祭り参加率は1/3を超えていました。2人がハーフを完走。ハーフマラソンを走るのは初めてだったとか。給水係にも2人。また会場には友達の応援をしている留学生が何人もいました。

写真班の感想は「クラブ対抗で出てくればいいのに。」「自分も走りたくなった。」これを読んでいるあなた、来年は、小樽運河ロードレースに参加してみませんか。OBとして走るなら、4年生はまず緑丘会に入りましょう。私は商大卒ではありませんが、上記の駅伝レースをきっかけに入会しました。出場と運営ボランティアはもちろん、応援も参加です。残り1、2分、ゴール会場付近の声援で力が湧きます。あとひと踏ん張りだ。友達に差を付きたい君、笑顔でゴールと疲労困憊壮絶ゴールのどっちを選ぶ？





「小樽運河ロードレース」に参加して

昭和35年卒 小関 高士

4月半ば、昭和40年卒の新山邦幸さんから電話があり、今年の「おたる運河ロードレース」に小樽商大の学生、教職員、OBが大挙して参加し、母校を盛り上げたいという企画があるが参加しませんかというお誘いを受けました。ここ数年来、私もこの大会のボランティアとして、お手伝いしていたこともあり、心動かされましたが、ハーフマラソンの制限時間が2時間10分というのは、今の私にはかなりきついのので、当初は参加をためらっておりました。その後、再びお電話があり、大学側のご配慮で参加者全員に小樽商大のネーム入りのユニホームを作っていただけるようになったという連絡があり、私も現役の学生の皆さんと同じユニホームを着てレースに参加できるラストチャンスかも知れないと思い、多少の決断を要しましたが、ハーフマラソンの種目にエントリーしました。

若い後輩の方々と同じスタートラインに立てる喜びと不安の中で、6月18日のレースを迎えました。空は澄みわたり風もなく絶好のマラソン日和となりました。会場となった色内埠頭公園には大会運営のためのテントが立ち並び、参加クラブの旗やのぼりが掲げられ大会の雰囲気盛り上がっていました。会場には、和田健夫副学長自ら小樽商大の校旗を持って応援にかけつけ、選手、サポートチームの一団の中に、お見えになっていました。

陸上部員の方々が、何かの手違いでエントリーもれになったのは、大変残念でしたが、学生5名、教職員2名、OB4名がそれぞれ力を合わせて、ハーフ、10キロ、5キロの各種目に出場しました。私の参加したハーフマラソンは、午前9時にスタート。コースは、色内埠頭を出て、観光客でにぎわう小樽運河を左に見て小樽築港方面に向かい、平磯トンネル前で折り返し、海岸沿いの通りをひたすら走り、祝津の水族館前の駐車場を1周して、再び高島トンネルをくぐり高島漁港

を経て、色内埠頭公園に戻る21.0975キロメートル。私は、選手集団の最後尾からスタートし、マイペースを守ることを念頭に、汗をふきふきゴールをめざし、沿道の観衆の大声援に後押しされ、何とか完走することができました。途中、同じユニホーム着た女性の留学生と励ましの言葉を交わしたり、母校の先生と間違われ「教授頑張れ」とひやかされたり、楽しく走ることができました。

大会終了後は、教職員、学生、OBがそろって、レストラン「ニュー三幸」でビールパーティーを開き、親睦を深めることができました。今回のこのような企画は、初めてということもあり、小樽市民に小樽商大をアピールするには参加人数が少なかったように思われます。

来年はもっと多くの学生、教職員、OBの皆さんと“おたる運河ロード”をさわやかに駆け抜けたいものです。そんな夢を描きながら、また練習に励みたいと思います。終始、応援の先頭に立っていただいた和田副学長をはじめ、サポートしていただいた学生の皆様に心からお礼申し上げます。



HEALTHY LIFE JOURNAL

ヘルシーライフジャーナル

NO. 48 2006.10
小樽商科大学
保健管理センター

健康な戦争

今回は、一見健康とは関わりがないようなことを書かせていただく。

先日、広い見識で知られている加藤周一さんの講演会を聴きにでかけた。医療者の憲法九条の会が主催していた。わたしは、医療とこの憲法にどんな関係があるのか不可解だった。また加藤さんは、第二次世界大戦で日本が敗戦したすぐあとに東大を卒業し、戦後フランスで勉強をしていた元医者であるから、どんな意見であるのかに興味があったわけである。

まず健康とはどういう性質があるものなのか。それが充分にあるときにはあまり意識しにくいものだ。学生さん達は若いので、大体そうであるとおもう。また健康は、元気だということでもあるから、自分の体力や意志のままに活躍したいものである。

健康であるのは喜ばしいことである。しかしその状態で完全に十分であるとはかぎらない。それがある副作用のような事を起こすかもしれない、という問題がすこし残る。これは後段で触れることにする。

ところで医療は、医学を基礎としているので、自然科学の方法に加えて、命を助ける倫理がその力の元になっている。人間社会のなかで広くいえば、福祉ということになるだろう。

加藤さんが言うには、近代思想の重要問題は人権である。まず始めにあるのが「生存権」、つまり生き物として肉体と生命を守る物理的なこと。次に「福祉」、これはひどい貧乏や生活格差をなくすること。そして「自由」の問題である。この順番に重要であるということだ。人間の集団のなかでは、しかし、おそらくこの逆の順番に意識されることが多いのではないだろうか。加藤さんによれば、とにかくこのいずれもが、憲法九条の二つの項目と深く関わっているという。

日本国憲法第九条

- 一、日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- 二、前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

日本は全世界のなかで生活文化の水準が最も高い方であろう。今がいちおう健康であると、かえって将来の健康あるいは病気のような不都合を予知することが難しい。症状がはっきり出てこない、病気だと分からないようなものである。これは肉体的こと、精神のこと、社会のことのすべてに言えるだろう。元気な人はともかく突き進む力を持っているが、それによって生じる危険を、合理的また客観的に

想像する隙がなくなる。

話は少し政治的なことに替わるが、国際社会のなかで日本を「ふつうの国」にしたいという考えがかなり前からあった。国の防備はもちろんのこと、ふつうに戦争ができるようにしたいということだ。

九条は平和主義を明瞭に表明している、世界でまれな憲法である。加藤氏は、九条のうち一項でもやめたら人権と自由は崩壊することが明らかであると述べた。

しかし、憲法を変えるには時間がかかるので、その方向の政治家などはじりじりしているのではない。自衛隊法などの制度にはもう手をつけた。(海外派遣法)。しかしそれだけでは不十分である。国民がその気になってくれなければ、改憲は進まない。安倍晋三首相が、「美しい国へ」を書いている。どんな美しいことがあるのかと見てみると、彼はプリンスと呼ばれる若手であるためなのか、日本周辺の歴史観に少し深みがかけているようだし、そうして血統のせいか妙に生々しいところもある。教育基本法の改正に最力点を置くそう。しかし教育の場で、法律によって「愛国心・郷土愛」を規定するのはまちがっている。愛は自ずと生じるものだからである。もし法律になると、有無をいわせない強制力が生じるから、我々はそれに従わなくてはならぬことになるだろう。

かくして、ともかく若い子らの頭が変わったら、必要に応じて戦争を始めることはごく容易になる。このことはいわば深謀遠慮の段取りでないかと思われる。

戦争は、健康の基礎としてある人権を根こそぎ破壊するものである。だから、教育基本法の問題はもちろんであるが、特に憲法九条をめぐる議論は受け身であってはならないと思う。厳しく注目しながら、できる限り反撃する必要がある。健康なまま、病的な行動に向かうことは、ヒトのつねであるからだ。

参考資料

- 一、加藤周一対話集 5
歴史の分岐点に立つて かもがわ出版
(図書館にあります)
- 二、美しい国へ 安倍晋三 文春新書
- 三、昭和史(同じく戦後編) 半藤一利 平凡社
(図書館にあります)
- 四、加藤周一氏の講演のDVD
(保健センターから無料で貸し出します)

小樽商科大学
保健管理センター
所長 浅沼 義英





第54回緑丘祭を 終えて

▼第54回緑丘祭実行委員



実行委員長 中村 幸穂

緑丘祭も54回目ということで、今年の緑丘祭では「様々な年代の方が楽しめること」と「気軽に参加できること」を目標にし、商大生はもちろんのこと、小樽市民の方々にも参加してもらえよう祭を目指しました。特に、毎年親子連れの方が多く来ているので子供も楽しめるような企画を行い、クロスワードやスタンプラリーといったステージ上で行わない気軽に楽しめる企画も増やしました。参加してくれた方の数もなかなか多く、成功だったと思います。

当日は天気にも恵まれ、学生による出店も近年では最多の40団体と、大いに盛り上がりました。毎年恒例の企画「流しそうめん」では、流しそうめんを目当てに早い時間から来た市民の方もいて、企画の開始時には大勢の人で盛り上がっていました。

最後になりましたが、緑丘祭に協力してくれた方、参加してくれたすべての方の力によって今年の緑丘祭もつつがなく開催することが出来ました。本当にありがとうございます。

実行委員の中に3年生が3人しかおらず不安もありましたが、いろいろな方の協力やアドバイスもあり、楽しんで緑丘祭の運営が出来ました。皆さんの中にも緑丘祭での楽しい思い出がなにか残っていたら、委員としてとても嬉しいです。

第54回

緑丘祭

みんな主役になりました！



緑宵祭

第15回

第15回緑宵祭を終えて

▼第15回緑宵祭実行委員



実行委員長 坂下 潤平



今年度の緑宵祭テーマは『We are the World』。夜間主学生一人ひとりの手で緑宵祭を作り上げ、そこに私たちだけの世界を創り、みんなが主役となって純粋に楽しもうという思いを込めました。

その中で昨年に引き続き、サークル未加入者の参加、限られた予算の中での運営が今年の課題でありました。しかし、そんな課題も実行委員を始め、各サークルの部長の方々の協力のおかげでクリアすることができました。

サークル以外からの出店も増え、会場は昨年以上に盛り上がった場となりました。また、予算に関してもなんとか乗り越えることができ、全てにおいて来年に繋がる緑宵祭となりました。

学生数の減少が避けられない夜間主ですが、そんな中でもいかに主体性を発揮するか、そしていかに充実した緑宵祭を作り上げるかがこれからも私たちに課せられる問題でしょう。しかし、今年がそうであったように、来年以降も夜間主の学生であればきっとそんな荒波も乗り越えてくれると信じています！それほど、夜間主学生の力を思い知らされた緑宵祭でした。

私自身、実行委員長としても何度も周りの人に助けられました。そのおかげで、この緑宵祭も大成功に終わることができました。本当に本当にありがとうございました！

来年の実行委員長には大いに期待しています。



平成
18
年度

●サークル加入状況

平成18年9月現在

	性別	学生数	加入者数	加入率(%)	内 訳			
					体育系	加入率(%)	文化系	加入率(%)
1年目	男子	307	183	59.6	154	50.2	29	9.4
	女子	243	126	51.9	113	46.5	13	5.3
2年目	男子	385	244	63.4	171	44.4	73	19.0
	女子	208	154	74.0	118	56.7	36	17.3
3年目	男子	329	175	53.2	122	37.1	53	16.1
	女子	223	110	49.3	75	33.6	35	15.7
4年目	男子	400	181	45.3	124	31.0	57	14.3
	女子	300	113	37.7	63	21.0	50	16.7
計		2395	1286	53.7	940	39.2	346	14.4

*加入者及び非加入者は、実人数であるが加入者内訳については、体育系と文化系の両方に加入している学生がいるため延人数で表す。
*%表示は、学生数（在籍者）に対する割合を示す。

●学生団体一覧

体育系サークル

平成18年9月現在

No	団 体 名
1	硬式庭球部
2	軟式庭球部
3	硬式野球部
4	準硬式野球部
5	基礎スキー部
6	男子バスケットボール部
7	女子バスケットボール部
8	ワンダーフォゲル部
9	合気道部
10	卓球部
11	漕艇部
12	ヨット部
13	空手道部
14	サッカー部
15	ハンドボール部
16	羽球部
17	水泳部
18	弓道部
19	ゴルフ部
20	陸上競技部
21	剣道部
22	Be-Pal
23	トランポリン競技部
24	ラグビー部
25	アメリカンフットボール部
26	男子バレーボール部
27	柔道部
28	チアリーディングサークル
29	ピリヤード同好会
30	軟式野球同好会
31	ラケットサークルピンポン
32	ダンスサークル
33	G・P・C
34	女子ハンドボールサークル
35	FREE BALL
36	球技同好会(エールディビジ)
37	ミニバレー同好会
38	夜間主バドミントンサークル
39	夜間主テニスサークル
40	フットサルサークル

文化系サークル

平成18年9月現在

No	団 体 名
1	室内管弦楽団
2	フレタラムアンサンブル
3	グリークラブ
4	軽音楽部 -ECHOES-
5	フォークソング部
6	E.S.A (英語部)
7	アイセック北海道委員会
8	囲碁・将棋部
9	CPU研究会
10	演劇戦線
11	会計研究会
12	Human Network Club
13	ジャズ研究会
14	国際交流サークル
15	緑法会
16	文芸サークル アジュナシア
17	写真部
18	女声合唱 カンタール
19	アウトドア ボラネット クラブ (OVC)
20	キャリアデザインプロジェクト(CDP)
21	Not hid
22	1300・2600 (イチサンニイロク)
23	生け花サークル
24	グリーンヒル・ネットワーク(GHN)
25	聖書研究会

学生団体

平成18年9月現在

No	団 体 名
1	学生自治会執行部
2	ゼミナール協議会
3	体育常任委員会
4	音楽芸術団体連合会
5	緑丘祭実行委員会
7	夜間主自治会
8	緑青祭実行委員会

大家族のような仲間たちと暖かい雰囲気で活動しています。

.....プレクトラム・アンサンブル



小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル！？何？もう一回言って。何のサークル？

もうこのような会話を何度したでしょうか。確かに、この長い名前の中に我々の活動を想起させてくれる情報はほとんどありません。アンサンブル・・・音楽系？そうです！我々は商大音楽系サークル最大の部

員数を誇るマンドリンオーケストラなのです。現

在、男子19名女子37名の56名で活動

しています。マンドリン、マ

ンドラ、マンドセロ、クラシックギター、

コントラバスの5楽器6パートで構成され、マンドリ

ンオリジナル曲だけでなく、クラシック曲やポピュラー曲など様々なジャンルの音楽を週2回全体で集まって練習しています。入学式演奏、春、夏、秋3回の合宿、夏休みに道内各地を回る演奏旅行、定期演奏会などイベントもりもりです。北大や藤女子大とも交流があります。

遊びたいときに遊べる、練習したい時には練習できる。大家族のような仲間たち。それがプレのよさです。

マンドリン音楽に触れてみませんか？11月26日（日）小樽市民会館でお待ちしております！



競技も行事も一生懸命！それが水泳部

水泳部.....

こんにちは!!水泳部です!!!!私たちの部活は、現在選手19名・マネージャー7名の計26名で活動しています。選手の中には、水泳をずっと続けてきた人もいれば、ほとんど水泳は初めてという人もいて、水泳経験は全く関係ありません。なので「痩せるために泳ぎたいけど…」という人でも私たちは大

大大歓迎です!!!!

もちろん競技としての水泳の面でも私たちは頑張っています。

ここ数年、全国の国公立大学だけで行われる大会や、北部地区の大会などに出場したり、北大などの強豪校やその他たくさんの大学とも定期的に試合をして、技術を磨いています。

私たちの活動場所は、主に坂の上の商大プールです。普段の練習は、各個人の授業の空きコマの時間にやるので、放課後のバイト等には影響が出ません。

試合以外にもサマーイベントやコンパなど楽しい行事が目白押しで、水泳部に入ったら楽しめること間違いなしです!!!現在3年生の私が保証します!!!

少しでも気になった人はぜひ水泳部員に一声かけてみてください☆



留学生から見た日本

日本でのヨハンナ【第1回～第4回】

第1回

日出づる国へ1年間



クルムバッハ出身の学生ヨハンナ レッシュは、小樽商科大学への奨学金を得た。新しい世界や異文化を知ること、外国に1年行くこと—多くの若者は、そのことを夢見る。しかし、この夢を実現する者は、ほとんどいない。その大きなチャンスをしっかり捉えた一人がヨハンナ レッシュだ。パイロイト大学で経済学を学んでいる21歳のクルムバッハ出身の学生が奨学金を得て、1年間日本で学ぶことが許された。

2003年にカスパー・フィッシャー高等学校の卒業試験を終えた後、ヨハンナはパイロイト大学で学び始めた。「私は、なお語学を学びたかったし、ともかく外国語なら何でも」と述べるヨハンナは、スペイン語と日本語の履修届を出した。彼女は、すでに6年前から空手を習い始めており、それ以来、日本語には興味を持っていた。彼女にとっては、語学は、当初思っていたよりも簡単であった。「確かに、文法は全然違います。考え方を全く変えねばなりませんから。しかし、その代わり、ドイツ人にとっては発音は、超簡単です。」

言葉を知るとともに、その国を知りたいという欲求が生じてくる。ヨハンナは、躊躇することなく、彼女の日本語教師のアドバイスに従い、小樽商科大学で1年間滞在する奨学金の申請をした。パイロイト大学は、この大学と交流協定を結んでいる。ヨハンナは、すでに1年前に基礎書類を提出しており、彼女は大きな喜びに包まれるはずであった。しかし、この喜びは3月にかき消されてしまった。期待していた日本の奨学金の道が閉ざされ、授業料免除一学期ごとにおおよそ2000ユーロ—かかる—と格安の宿舎しか認められなかった。

そこで、ヨハンナは、滞在の資金を得るために、DAAD（ドイツ学術交流会）に奨学金を申請し、選考面接でボンに赴いた。：「そこでは、ほとんど期待薄でした」。ところが、それに見事成功し、月額725ユーロ以上の奨学金が約束されることになった。物価の高い日本では、つましい生活を送る学生にとってすら1000ユーロから1200ユーロかかる生活費を賄うには、確かに充分な額ではないが、「残りは、きっと何とかできるでしょう」。

ヨハンナは、2年間熱心に日本語を学び、すでにかなり堪能になっていたが、なにより彼女を喜ばせたのは、小樽商科大学では英語で講義が行われることである。もちろん、留学プログラムには、日本語、日本文化の講義があるので、留学後は、日本語もしっかり身につけていることであろう。

宿舎には、世界各国から来た40人ほどの学生が、ともに生活し、学んでいる。この雰囲気の中で学べることを、ヨハンナは大変喜んでいる。それ以上に、彼女は、日本人と交流することも望んでいる。「日本人は非常に控えめなことで知られています。しかし、私は、空手の練習を続けたいと思うし、そうすることで、日本人家族との接点を持てると思っています」。

小樽は、日本の最北の島北海道にある人口16万人ほどの港町で、「おいしいお寿司と冬の深い雪で知られています」。9月20日には、ヨハンナは、フランクフルトから日本に出発することになっている。：「私は冒険好きのタイプです。友達からは、『君は日本が良く合ってるよ。小さいし、良く笑う』と言われました」。

バイエルン ルントシャウの読者は、「日出づる国」のヨハンナに何が起きているかを、ともに追うことができるであろう。アンナ プンケが1年間、ニュージーランドの「キウイ」で、彼女の滞在について記述したように、ヨハンナが、おおよそ月1度、日本で何が起きているのか、彼女の夢は叶えられているのか、を編集部あてにメールで報告することにする。

10/11.09.2005

※以下の文章は、ドイツ、バイエルン地方の新聞「バイエルン ルントシャウ (Bayerische Rundschau)」に掲載された本学交換留学生(ドイツ パイロイト大学)ヨハンナ レッシュ (Johanna Resch)についての記事です。彼女は、本学に滞在後、月に1,2度、バイエルン ルントシャウ編集部にて日本での体験記を送り、それが「日本でのヨハンナ」と題する欄に掲載されることになりました。

大変興味深い記事ですので、順次紹介することとします。

(日本語訳は秋山義昭学長による)

ドイツの地方紙『バイエルン・ルントschau』に掲載された本学交換留学生ヨハンナ・レッシュの日本滞在記「日本のヨハンナ」第2回目
(日本語訳は秋山義昭学長による)

第2回

人生の冒険

新シリーズ：ヨハンナ・レッシュの日本での初めての体験

およそ5週間前、クルムバッハ出身のヨハンナ・レッシュは、人生の冒険への途についた。1年間、21歳の彼女は日本へ留学するつもりだ。そして、そこで彼女に何が起きているのかを、「バイエルン・ルントschau」の読者に、彼女が体験を報告するところの、今日から始まるシリーズ「日本でのヨハンナ」で、お知らせする。今日は、彼女の最初の印象を記述している。

「9月20日にフランクフルトから飛びたち、街の灯がだんだん小さくなってくると、私にとって人生最大の冒険の始まりです。日本での1年間——一体、どんな関わりがあったのだったのだろう？

2日後、ソウルで1泊の後、札幌千歳空港に到着。そこには、すでに私のチューター（えみな）が待っていてくれて、国際交流会館までの道案内をしてくれました。

国際交流会館は、街を見下ろす小高い丘の上にあります。北海道の南西にある小樽市は、人口16万人の、日本的な規模としてはかなり小さく、数日後にはもう行き先を間違えることのないような、全体を見渡せるほどの港街です。

しかし、たった一人で全てうまくやっていけるかとなると、それは別問題です。私の日本語の知識で、スーパーでの買物は問題ないのですが、日本人の付き添いがいなければ、役所や銀行で必要な書類を作成することはできないでしょう。

幸いなことに、その点に関しては、私は一人ではありません。短期留学プログラムには、4つの大陸から来た学生が参加しています。：アメリカ人、中国人、韓国人、ニュージーランド人の他、ヨーロッパ人・スペイン人、イギリス人、フランス人、オーストリア人が各1人、何人かのドイツ人、そして1人のアイスランド人が多数を占めています。授業は10月初めから開始することになっていたのですが、数日間あたりを探索する時間がありました。遠出としては、人口170万、北海道の最大都市札幌へ行きました。列車で1時間後、私たちは、摩天楼と何百というネオンサインの間で再会しました。巨大なショッピングモールが札幌駅を縁どっています。特に人目をひくのは電気製品専門店で、10階まで、ノートパソコンからMp3プレーヤーまで、ありとあらゆるハイテク電化製品が売られています。

しかし、とりわけ私たちに興味深かったのは、炊飯器を買った家電売り場です。会計ですぐにそれぞれ個人的な力

ードを手に入れ、全く待たずに済むようになりました。それは、日本人の顧客満足に努める優れたサービスの数多い例の一つにすぎません。さらに、そこでは、世界的に知られたイノベーションの数々の証拠も見せられました。；シンプルで知的、そして便利：どんな形のボール箱にも一瞬のうちにプラスチックの把手をつけることができるシステム！

私たちは、そのようにして大きな箱を比較的優雅に持ち運びできたにもかかわらず、皆さんの視線を集めました。”西洋人”がこの北海道に。特に、小さな街ではいつもちょっとしたセンセーションをひき起こしました。時には、ひそひそ声で話をされたり、ジロジロされたりするばかりでなく、指さされることもあります。例えば、次のようなことがありました。：私は、大学の歓迎パーティーで何人かの女子学生に取り囲まれて、着ているものや髪の毛を細かく観察され、大声で”可愛い”と言われ続けました。

原則的に、外国人に対する関心には非常に大きなものがあります。今まで、私は、どこでも心から歓迎され、興味深げに挨拶されました。日本人学生の多くは、確かに英語を上手に読み書きするけれども、ほとんど一言もしゃべれないので、残念ながら言葉の障壁を克服することは難しいです。

できれば将来、自分も小樽商科大学で語学の講義をより効果的なものにすることに貢献できればと、ますます思うようになりました。今、週に一度、ドイツ語の講義でアシスタントをし、間もなくドイツ語担当の教授が会話のための特別コースを開くので、私はそこでお手伝いをする事になっています。

それ以外では、私は、ほとんどの時間、日本語に取り組んでいます。意味や発音だけでなく、字画数、筆順を含め、月に150の新しい漢字を覚えなければならず、私たちの日本語の先生のレベルは、非常に高いです。さらに、私達は、学期の終わりに試験はありませんが、毎週小テストが課されます。

高い留学費にもかかわらず、私は非常に楽しんでいます。とりわけ、芸術的な構成、すなわち漢字の書体がとても気に入っています。そうでないのに、街路標識がもっと読めて理解できる人があるのは、いつも信じられない気持ちで一杯です。」

22/23・10・2005

第3回

異文化に浸る

バイエルン ルントschauシリーズ「日本でのヨハンナ」；2か月間の多くの経験

クルムバッハ／小樽。ヨハンナ レッシュが日本に行つてからすでに2か月になる。21歳の彼女は、そこで1年間留学する。このシリーズ「日本でのヨハンナ」で、彼女は、今日、大学での日常、初めての茶道、ある小学校訪問について報告する。

「私は、毎日、新しい出来事に驚く一方、ここでの日常が徐々に姿を現しています。その一つは、勉強！です。およそ2000名の正規学生が通う小樽商科大学は、外国人留学生のためのいわゆる”短期留学プログラム”で、経済学、日本文化、語学の講義を提供しています。大学の大きさが大きなギムナジウムを思い出させるだけでなく、ここでの教え方が非常に熟練しています。ドイツとは違い、例えば、ここではすべての講義で出席義務がありますし、小テストも繰り返し行われます。

当初は私たちも不慣れでしたが、このシステムには確かにメリットがあります。というのは、常にコンスタントに集中して参加することを余儀なくされるからです。さらに、恵まれていると思うのは、いくつかの講義は日本人学生にも開放されているので、特に奨励され、それだけに一層興味深い多くのグループ学習です。

大学以外でも、私は、ここでは常に他の国から来た人々に取り囲まれており、そのことが私の英語の語学力を非常に役立つばかりでなく、本来は同じだがよく似た”西洋”文化間の微妙な違いを見極める目を養ってくれます。私たちは、この間に、非常に緊密な共同体を形成し、誰かの深刻なホームシックを克服する助けとなっています。

私たちは、できるだけ多くの文化的な催しに参加しています。小樽市が私たちのために文化の午前という催し物をしてくれました。そこでは、古典的な茶道を体験し、生け花の芸術、毛筆の練習をすることができました。特に茶道では、伝統的な日本一見知らぬ魅惑の世界！を垣間見ました。

靴を脱いだ後、私たちは床全体に畳を敷いた小さいが明るい部屋に入りました。そこでは、全員着物を来た何人かの老婦人が迎えてくれました。続いて行われた茶道は、特殊な規則に従っていました。；まず、儀式ばった花飾り、

壁に掛けられた絵にいささか驚きました。それから、座るよう促されました一確かに膝を折り曲げて正座する一誰にとってもあまりたやすいことでなかったに違いありません。最初に、甘いものが出されました。これはお茶の苦みをいくぶん和らげることに役立つものです。そして、緑の抹茶を木の筆のようなものを使って、小鉢にお湯を注ぎ、かき混ぜました。器を受け取り、そこに描かれた芸術的な絵の価値を表現するために、それをまず2度回します。それから、お茶（ついでに言うと、これは非常に健康にいい）をできるだけゆっくりと飲み干し、器の縁を指で2度ぬぐい、これを両手で再び自分の前におきます。

数日後、私たちは小グループに分かれ、小樽のいくつかの小学校を訪れ、全く違った文化的体験をしました。私は花園小学校に割り振られ、11、12歳の子供たちに出迎えられました。教室では、子供たちとやりとりをしたり、自分の国について説明しました。続いて、子供たちといくつか遊びをしました。日本では、学校は午後に終わるので、全教室で給食が出されます。私たちも、一緒に食べました。

次の週末のプログラムには、また日本文化があります。；なかでも、典型的な温泉（地下の熱いお湯から引いた一種のテルメ）を訪問することになっていますし、太鼓コンサートの切符も手に入れました。また、たくさんの発見がありますよ！」

21・11・2005



ドイツの地方紙『バイエルン ルントschau』に掲載された本学交換留学生ヨハンナ レッシュの日本滞在記「日本のヨハンナ」第4回目
(日本語訳は秋山義昭学長による)

第4回

大晦日は家族の祭日

クリスマスと年末；日本では、このようにお祝いする。

ヨハンナ レッシュは、今年、クリスマスを手から遠く離れて祝う。21歳の彼女は、10月から日本に留学しており、そこでとても刺激的な時を楽しんでいる。このシリーズ「日本でのヨハンナ」で、彼女は、今日、最新の体験を記述し、日本人は年末をどのように祝うのかについて説明している。おはよう！ここでは、毎朝大学で日本人の友人に路上で出会うと、こう挨拶をする。そうこうしている間に、すっかり慣れてきたように感じる。

「天候に慣れることも必要です。ここ数日間、ほとんどぶっ通しで雪が降りました。それは、一方でロマンチックな冬のメルヘンを思い出させてくれますが、日常的には悪意に満ちています。；ここでは、歩道にも車道にも、灰をまくということをしません。そのために、多くの人が痛い目にあってきました。・・・私には、数センチ雪が積もった車道のアイスバーンを、車がどうしてもそんなに速く走れるのか、不思議でなりません。しかし、それで私の驚きが終わったわけではありません。－ここには、本当にロードヒーティングがあるのです！ 主要な交差点の少し前のアスファルトの中に、約25メートルほどの熱線が設置されているので、形状的に車が停滞しそうな所でも、運転に何ら支障がないのです。

けれども、寒い季節には、積極的な側面もあります。雪が降っているときなど、豊富な「温泉」の一つで疲れを癒すのはいいものです。温泉は大きな浴場で、その浴槽は地下の火山源から水を引いています。特別なこと：常に裸で入浴することです。；男性と女性の浴槽は別になっています。浴槽に入る前に、念入りに体を洗わねばなりません。そのために、座って使うシャワーがあって、シャワーの下にある腰掛けに座り、石鹸を使うことができます。続いていくつかある浴槽を選択しますが、外にあるものもあります。寒い冬の真っ只中に、熱い湯気の立つ自然石の浴槽につかり、隣り合っている森の鳥を観察するというのは、何とも妙な雰囲気です！。

日本文化の別の側面を、私たちは太鼓の演奏会で知ることができました。札幌の市民会館で、今か今かと幕が開くのを待ちました。ショウが始まり、大きな太鼓のそばに筋骨たくましい4人の男性が立っています。同じリズムの繰り返しで太鼓が打ち鳴らされた時、空気が振動するような感じを受けました。舞台装置が幾度か変わり、大きな、中くらいの、小さな太鼓を持った演奏家が、ある時は多人数で、ある時は少

人数で、また女性も舞台に現れます。私たちは、これらの演奏家たちが、何分間も腕のように太い棒で、ものすごいテンポで大きな太鼓を打ち鳴らす、いかに信じられない持久力を持っていなければならないかを、感じ取ることができます。賑やかな最後で終わりとなり、上演後も演奏者たちと握手をすることができました。

11月終わりの週末に、私たちはアメリカの文化的催しをしました。7キロの七面鳥と日本人のゲストで感謝祭、アメリカの収穫感謝祭をしたのです！それぞれが手料理を用意したので、最後には、伝統的なマッシュポテト、いろいろなサラダ、アメリカや日本のスナック、ニュージーランドやイギリスのデザート等の大きなビュッフェが出来上がりました。食事の前に、それぞれが感謝すべきことを何か挙げることにしました。私は、私を全てにおいて支えてくれている友人と家族、この日本にいたことができた機会に感謝をしました。

ここでは、クリスマスについては触れるつもりはありません。キリスト教は日本ではあまり普及していないので、ドイツにあるような待降節はありませんし、クリスマスイブも休みではありません。にもかかわらず、商店街ではクリスマスは絶好の稼ぎ時で、サンタクロースに関連するあらゆるアクセサリー類が売られています。

しかしながら、札幌では、ときどきクリスマスの雰囲気を楽しむことができます。札幌には、日本人に好評のミュンヘンのクリスマス市がたちます。そこには、炒ったアーモンド、ホットワイン、レープクーヘン等々があり、とりわけドイツ人の一団が来ますので、いつときドイツの自宅にいるような気分になることができます。

クリスマスとは逆に、日本人は年末は家族とともに過ごします。新年は、さらに、伝統的に故郷に帰る日です。たいいてい家族は、徹底的に家の掃除をし、新年を新鮮な気持ちで迎えるために、置物を片づけます。12月31日の大晦日には、長生きの象徴である長い蕎麦を食べます。」

19・12・2005

新任教員紹介

NEW FACE

藤生 源子

【ふじお みなこ】

商学部助教授
(経済学科)

皆さん、はじめまして。4月より経済学科に赴任してまいりました藤生源子です。今年度は短期留学プログラムの中級ミクロ経済学とゼミを担当しています。研究分野は理論経済学で、特に経済成長、経済動学の研究をしています。

ミクロ経済学を履修したことがある人は、消費者の効用最大化問題や生産者の費用最小化問題を聞いたことがあると思

いますが、それらは全て資源配分問題として捉えることができます。経済成長理論では、経済が最適な成長をするためには、毎期生産される財をどのくらい今消費してどのくらい将来のために投資するかという異時点間の資源配分が問題とされます。そして、ある配分に基づいて経済が成長していくとき、経済がどのように変動していくかを分析しています。

今はこうして経済学の教員をしていますが、私が皆さんと同じ大学生の時は国際関係学科に所属しており、経済学は教養程度でしか学んだことはありませんでした。その頃はバックパッカーに憧れ、休みになるとタイ、マレーシア、インドネシア、カンボジア、ベトナム等の東南アジアの国々を長距離バスや寝台列車で周ったりしていました。ちょっと危険なこともありましたが、今振り返るとあの頃にしかできなかった貴重な体験だったと思っています。学生の頃は何がやりた

いかわからず時間だけが流れ焦ったりもしますが、皆さんには、大学内だけにとらわれず、今しかできないことに挑戦してどんどん自分の世界を広げていって欲しいと思います。

私はこれまで千葉、福岡、東京、アメリカのボルチモアといろんな土地で暮らしてきました。今回北海道で暮らすことになり、冬の雪のことなど不安はまだありますが、自然に囲まれた生活はとても気に入っています。その中でも、通勤途中に電車から見渡せる車窓いっぱいに広がる石狩湾が毎朝の楽しみです。波打ち際ぎりぎりを電車が走り、さながら海の上を走っているような感覚さえ覚えます。空が青く晴れ渡った日は、海の色もいつもより青く光っていて何とも言えない光景ですよ。こんな素晴らしい環境で教員生活を始めることができ光栄に思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



田中 幹大

【たなか みきひろ】

商学部助教授
(商学科)

今年4月より赴任しました田中幹大です。生まれは神奈川県横浜市ですが、学生生活は京都・大阪と関西で送りました。北海道・小樽での生活ははじめてで、これからの冬の厳しさもまだ体験していません。冬の過ごし方など何か役立つ情報があればいろいろと教えて下さい。よろしくお願いします。

私の研究内容は、中小企業、特に中小

機械金属工業の経営・歴史分析です。中小企業を訪問して、ものづくりの現場を観察し、経営者から話を聞き、それをもとに中小企業の経営課題や地域との関係を考えています。また、中小企業を取り巻く問題が出てくる背景・歴史も調べています。これまで、「中小企業のまち」として有名な東大阪市を含む大阪地域の中小企業を中心に調査してきましたが、4月に小樽に来てからは、北海道・小樽の中小企業についても調べはじめています。小樽・余市では、不凍水抜栓をつくっている企業、ジュースを製造・販売している企業、蟹加工企業、鯨加工企業など、これまで調査したことのないタイプの中小企業を見てまわりました。また、旭川は家具の産地として有名なのですが、ここでは量産品家具ではなく、高級家具をつくっている企業が多く、スピニングアウトが盛んに行われており、こうした中小企業を調査してきました。

まだそれほど多くの中小企業を調査しているわけではないので、印象の域をでませんが、北海道・小樽には「おもしろい」中小企業がたくさんあります。大阪の中小企業は全体として、どうしても大企業の下請（大企業から仕事をもらう）の色が強いのですが、北海道・小樽の場合、下請をだす大企業がそれほど多くないということもあって、地域に密着し、製造から販売・営業までを含めた独自のビジネスモデルを構築して活動している中小企業が多いのです。

私が担当している「地域企業論」では、こうした北海道・小樽の中小企業の「おもしろい」活動事例などを参考にしながら、地域の中小企業の歴史や現在抱えている問題、今後の展望などを講義できればと考えています。小樽商大生の皆様、ともに勉強に励んでいきましょう。



石井 利昌

【いしい としまさ】

商学部助教授
(社会情報学科)

本年4月に愛知県の豊橋技術科学大学より転任してまいりました石井利昌です。出身は大阪で、これまで北海道には観光でしか来たことがありませんでしたが、実際に住んでみて北海道の壮大な景色の素晴らしさや食べ物のおいしさに感動しています。特に小樽は、町のあちこちに明治時代の面影を色濃く残しており、歩いているだけで楽しい気持ちになります

(ただ、まだ冬を経験していませんので、雪のない土地から来た私にとってはその点が少し不安ですが…)

さて、私の専門は、「オペレーションズ・リサーチ (Operations Research, OR)」といって、社会に現れる様々な現象に対し数学的な手法を用いてモデル化・分析することにより、合理的で適切な意思決定を支援するための研究です。例えば、宅配便の問題で言えば、最も時間を節約できるルートを考えることであったり、スーパーマーケットの問題で言えば、需要と供給のバランスのとれた在庫管理の計画を立案することであったり、コンビニエンスストアを新しく建てる際にどこに建てれば最も集客できるかを考えることであったりします。また、もっと身近な話題で言えば、例えば皆さんが旅行の計画を立てる際、どのルートを通りどこに宿泊すればできるだけ安くかつできるだけ多くの観光スポットに行ける

だろうか、などと考えると思いますが、これもORと言えるでしょう。但し、ORの重要なポイントは、これらの問題に対して、勘や経験に基づく判断ではなく、数学的な手法により合理的な解決策を考える、という点にあります。複雑化・多様化する現代社会において、ORの発想はますます重要になってきており、これから社会に出て行く皆さんにとっても大変役に立つ考え方です。

前任地豊橋では、工学部の教員として理系の学生を指導していました。また、私自身も工学部出身で、商学部の学生を指導するのは初めてであり不慣れなことも多いかもしれませんが、講義やゼミを通じてORの面白さや素晴らしさを少しでも分かりやすく皆さんにお伝えできれば、と思います。よろしくお願いします。



ニール・クライマー

商学部助教授
(商学科)

Statement of self introduction

本年4月に本学に赴任いたしましたニール・クライマーです。外国人学生のためのYOUCプログラムで、3講座、ゼミ、およびインターンシップを担当しています。クライマーという名前からお察し頂けるように、私は日本人ではありません。アメリカ人です。小樽に勝るとも劣らない位寒い街、オハイオ州クリーブランドで育ちました。

10年前に初めての北海道旅行で札幌を訪れてから、私は自他ともに認める熱烈な北海道ファンです。1998年には新婚旅行で北海道一周も決行しました。その旅の終着点が、この歴史ある美しい街、小樽でした。ですから、このような形で小樽に再び戻れたことを心から喜んでますし、なにか不思議な縁も感じています。

さて、小樽商科大学に選ばれた皆さんと私は大変運が良いと思います。なぜなら、本学は真の国際的な学術的経験を提供する日本でも数少ない大学の一つだからです。YOUCプログラムでは、多くの外国人教授が教鞭をふるい、毎年世界中から学生たちを受け入れています。どうか在中に時間を割いて我々

のことを知ってください。

私のバックグラウンドは、20年以上ビジネスの世界に身を置いた点で、大半の先生方のそれとは違っています。ビジネス・キャリアの殆どはソフトウェア業界における日米企業間のインターナショナル・ビジネスに関わるもので、日本全国だけでなく、韓国および台湾の数多くの工場、会社、研究所、を訪れた経験があります。私は5年前に大学に戻り、インク・ジェット・プリンター業界の技術戦略に関する研究に没頭しました。この研究は日本を代表する製造業者、キャノンとセイコー・エプソンに関する分析調査およびインタビューです。これらの企業の成功は、よく知られているところですが、社風および企業戦略は全く違ったものです。

私のクラスは英語で行われます。日本人学生の皆さんにとってそれが挑戦であることは十分承知していますが、皆さん、特に将来海外留学を考えている学生の方の参加は大歓迎です。

私は、3つの講座を担当します。秋学期に開講する「日本的経営入門」は、日本企業の経営方法、および、日本企業の経営と外国企業のそれとの違いについて考察します。私の経験上、比較対象となる外国企業の大半は米国企業です。本講座は、日本の雇用システムの3本柱、終身雇用制度、年功賃金、企業別組合、に関する歴史的発展を探究します。また、日本の製造業にも焦点を当て、なぜ、そして、いかにして日本が製造部門で成功を収めていったかを学びます。特に、トヨタの成功は卓越したものがあります。本講座ではその製造システムを探ります。

春学期には、「世界の中の日本企業」と「アジア太平洋マーケティング戦略」の2講座を担当します。「世界の中の日本企業」では企業間の国際貿易、企業-個人間貿易、および企業-政府間貿易に関連した問題をとりあげていきます。まず初めに、貿易の国際システムの歴史的発展に

ついて様々な角度から論じます。そして外国企業の獲得、インターナショナル・ジョイント・ベンチャー、金融商品の購入等、様々なタイプの国際業務について学習します。この講座は英語を母国語としない学生には少し難しいかもしれませんが。もう一つの講座「太平洋マーケティング戦略」は前者に比べリーディングの量も少なく、内容もノンネイティブスピーカーにとって理解し易いかもしれません。ただし、クラス・ディスカッションへの参加が要求されます。「太平洋マーケティング戦略」はマーケティングよりもビジネス戦略により焦点を当て、MBAプログラムで一般的に行われているように、ケース・スタディを使った解説を行います。各ケース・スタディは日本、中国、韓国、シンガポール、もしくは他のアジア諸国のビジネス、または、企業に関連するものです。アジア市場でビジネス・ピープルが直面するユニークな挑戦について学びます。

私はゼミも担当します。私のゼミに対するアプローチは皆さんが知っているものと少しばかり違うかもしれません。私のゼミでは、生徒が各自研究レポートを発表するのではなく、ゼミのメンバー全員が1つのプロフェッショナル・レベルのビジネス計画を作成します。ゼミ生は2,3名で構成される小さなグループに分かれ、各々のグループが部門ごとに責任をもちます。作業は全員に公平に分配されます。日本人および外国人両学生が共に参加することで、より高い学習効果が期待されますので、国際ビジネスに興味のある日本人学生の参加は大歓迎です。ディスカッションの大半は英語ですが、ゼミ内の日本語のディスカッションも許可します。

私は、ここ小樽商科大学で、できるだけ多くの学生の皆さんとお会いし、共に国際ビジネスに関する多くの事柄を学んでいきたいと願っています。どうぞ宜しくお願いします。



マーク・ホルスト

商学部助教授
(言語センター)

How do you do? My name is Mark Holst, and I've been teaching here since April 1999 as an English instructor in the Center for Language Studies. However, I might be officially considered as a new face, because from this year I became a full member of the academic faculty. I was very happy to become more integrated into the university, since during the past seven years I have had a lot of good times working here.

Well, who am I? I was born in 1963 in Cardiff, which makes me Welsh by nationality, if not by accent. After this auspicious beginning I moved to many places around the UK, going to primary school in Scotland (Inverness), and secondary school in the south of England (Reading). At high school my interests drifted towards the humanities, especially history and English literature, and by the time I came to apply to university I fancied myself as a bit of a dark, deep thinker interested in the meaning of life and everything else. Predictably then, I entered university (Leicester) to study philosophy and English literature for three years, graduating in the summer of 1984.

After all that time attempting to fathom the depths of the human condition, I was very eager to explode out of my ivory tower and make an impact on the real world. Yet, as an ex navel-gazer, what could I do to earn my daily bread? Many of my contemporaries were set on working in some office or other, but I was completely uninspired by the thought of putting on a suit every day and working at a desk for the next forty years. I had to think fast! Luckily, my formative years moving around the UK had instilled in me some nomadic instinct, and I realized that what I really wanted to do was to live and work abroad. The British weather was the key factor in this, I think and like a bird flying south for the winter I headed off down to sunny Spain (Vitoria) to begin my career as an English language teacher. Since then, I have taught in Greece and Japan, as well as returning home a few times to teach at schools in London and Edinburgh. Although this career started out as a temporary measure to get the traveling bug out of my system, the longer I teach, the more I have come to enjoy it, and the more interested I become in languages and in human communication. Eventually, I made my way back to academia and up to Edinburgh to study applied linguistics. Here I studied how people acquire their native language, and how language teachers can best teach a second language. From there, I came over to Sapporo, where I have lived ever since, working first at Hokkaido University, and then at OUC.

Next, my research interests. In order to effectively develop people's communication skills, it is necessary to consider human interaction according to a variety of contextual factors, such as

where we are speaking, our purposes for speaking, our relationship with the other speakers, or our emotional state. I am very interested in all of this, and I am especially interested in comparing Japanese and English communication styles and how they reflect the respective cultural norms of each society. This is the area of research of sociolinguistics, conversation analysis and pragmatics. Using the research methodology of these disciplines I examine the differences in Japanese and English conversation patterns, most recently regarding doctor-patient interaction. To do this I record a number of conversations and look for regular linguistic features that emerge between the participants. I am now also interested in the language of broadcast interviews how interviewers try to get the information they want from their interviewees, and how the interviewees try to foil them by protecting their secrets and giving prominence to their own agendas.

Finally, I really enjoy living in Hokkaido, as it has all the great conveniences and services of modern Japan combined with the dramatic landscapes that we can quickly escape to. As for my job, I really enjoy teaching the bright and questioning students here who always keep me on my toes and make every class a challenging experience. We are lucky in having such a small and friendly campus where everyone can easily mingle together, and the large number of foreign students and staff give it a really international feel. All this bodes very well for our future, and I'm looking forward to working in Otaru Shoudai for many more years to come. Hope to see you around.

商大掲示板

平成18年度 学生論文賞の募集

小樽商科大学 教育開発センター、ビジネス創造センター(CBC)

両センターは、下記の要領で学生諸君の論文(研究)を募集します。今年度は、審査を二段階方式で実施します。
(第1次審査：プレゼンテーション方式、第2次審査：査読方式。)

■論文テーマ 自由論題

■応募資格

- 本学学部生、大学院生および研究生、科目等履修生。
- 審査は、「学部生部門」と「大学院生部門」に分けて行なわれます。(研究生および科目等履修生は学部生部門に入ります。)

■応募および提出物の規定

●概要(第1次審査用)

所定の書式に、論文タイトル等の必要事項を記入して「概要」を作成し、提出期間(10月23日(月)～27日(金))中に、学務課窓口へ提出して下さい。これをもって「エントリー」とします。所定の書式以外の応募は受け付けません。
エントリー用の書式は、10月10日(火)より、CBCのHP(<http://www.otaru-uc.ac.jp/cbc/>)でダウンロード可能です。

●論文(第2次審査用)

A4サイズ 横書き。表紙と目次を除き20枚以内(厳守)。注釈・図表・データ等は枚数制限に含みます。
1枚あたりの文字数は、40字×40行を超えないこと。文字フォントは10.5ポイント以上とする。
欧文の場合は、ダブルスペースで8,000語以内とする。枚数制限は、和文の場合と同様。
原稿にはページ付けを行ない、原本ならびにコピー2部を添えて提出して下さい。

※論文の書式等については、執筆要領は、『平成18年度シラバス』の「卒業論文執筆要領」に従って下さい。但し、専門分野によって異なる部分は、その分野の慣例に従って下さい。法律文献の引用フォーマットに関する資料が欲しい方は、CBC事務局(2号館1階)までおいで下さい。

※論文中には、所属ゼミ・教員名はいっさい記載しないで下さい。

■審査項目

○第1次審査……次の4項目について、プレゼンテーションを通じて審査する。

①研究の目的、②アプローチ・方法論、③内容・論理、④研究の独創性。

審査員1人当たり、20点(各項目5点ずつ)で審査。

最低点と最高点を除く点数の平均を、その応募者(グループ)の評価とする。

○第2次審査……以下のような観点から、2人の審査員が審査する。

①論文形式・アプローチ・方法論、②テーマ設定、③論理構成、④独創性、⑤その他。

●提出期限

○概要(第1次審査用) 10月23日(月)～27日(金)

○論文(第2次審査用) 11月27日(月)～30日(木)

*最終日の受付は、いずれも12:00とする。

●研究奨励金

大賞	10万円	優秀賞	5万円
佳作	3万円	奨励賞	1万円

提出先/学務課窓口(管理棟1階)
問合せ先/CBC事務局(2号館1階)

小樽商科大学グリーンヒル(学生支援)プロジェクト

毎年、地域社会における学生の皆さんの課外活動を支援するため以下の応募条件で、「小樽商科大学グリーンヒル・プロジェクト」を募集しています。教職員の目からは気がつかない若い皆さんからの独創的な提案と実行を期待しています。

■応募条件

- ・本学の学部学生、大学院学生で個人又はグループ。
- ・課外活動であること。
- ・地域社会との文化的・社会的連携等に寄与するもの。
- ・学生自身が企画・運営・実施するもので、原則として年度の2月末までに終了するプロジェクトであること。

(本年度の募集は終了しました。)

写真でみる小樽高商・商大小史 ⑫

百年史編纂室

デーゲン教師のこと

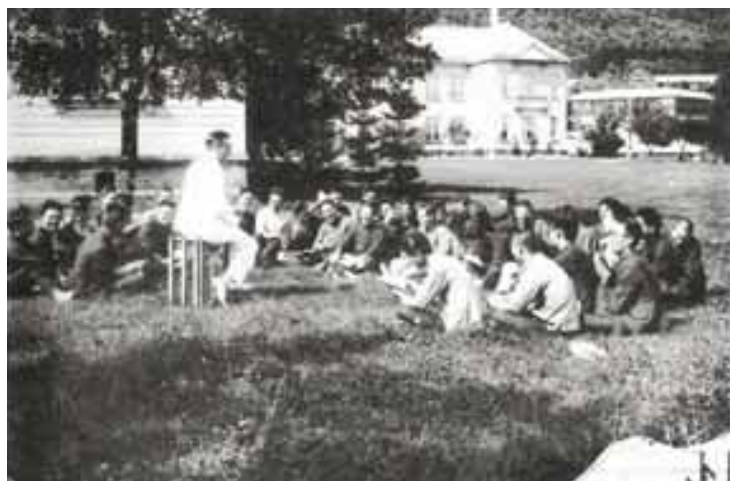
先日、卒業生の会誌『緑丘』の編集をされている坂本さんが来られた。その際に、復刻版『小樽商大緑丘会報 第一号(昭和三十三年)』第三十六号(昭和四十八年)をいただいた。現物は図書館にあるが、製本されて便利なので、ページを改めてめくる。この年代であればまだ初期の卒業生が健筆を奮っている。元教員の寄稿文や当時懸案であったマッキンノン先生の招待準備に関連する一連の記事(寄附金募集等)など興味深いものもある。

▲デーゲン教師の言葉 (第13回卒業アルバム1926年)

「昭和三十八年か暮れ近くだった。三井船舶の新藤さんから電話で、デーゲンさん東京に現れると言うので、二三人で

打ち合わせしてデーゲンさんと落ち合った。／その時のデーゲンさんは口の廻りに亀の子ダワシをつけた様な髭をつけ、……美青年の面影は少しもなかった。タイの勤務先で「休暇をとつて故国のスイスに行つて、再びタイに戻るといつことで、日本国から米国に渡る一切の面倒は三井船舶の船に乗せて新藤さんの御世話になつた……」。／東京で逢つたデーゲンさんに髭のことを尋ねたら『女房の奴僕のいやなことをしたから僕も女房のいやだと言う髭を生やしたんだ』とニコリとせず言われた……。後に一九五八年のバンコク出張の際、再会しようとしたところ、日本大使館から一ヶ月ほど前に病死したとの連絡を受けた(古関周蔵(大正一三年卒)「デーゲン教師について」『小樽商大緑丘会報』第八号一九六〇年二月一五日)。

次は、古関氏の記事の中にある新藤孝二氏の部下でもあった山中氏によるものである。デーゲン教師のことを「ピアノは特に堪能で又声楽にも優れた高度のミュージシャンでもあった」と振り返る。授業については「先生はよく我々の頼みを入れて屋外授業をやつて呉れたものである。当時先生が自ら作詞作曲した英語の高商の歌がある……長い冬から解放された後の初夏など、ポプラ並木に囲まれたクロイバーが一面に生い茂つた校庭に、太陽の光を全身に浴び足を投げ出しての集いは若かった我々の緑丘生活の忘れ得ない一駒である」。デーゲン教師は、前述の旅行の際、日本から米国への貨物船便乗申し込みにも苦勞していたが、「船賃も……先生の負担がないように」三井船舶の新藤氏と山中氏が手配した。「……某日出航の浅香山丸(二万屯)に乗船決定し先生もさぞ安堵



▲デーゲン教師の屋外授業 (第14回卒業アルバム1927年)

したことを思う。この時の喜びを『教え子に再会』という一章で詳しく一周記に述べている。就航までには日数があり、「上野音楽学校や方々都内見物をした様で、上野駅で時の大野学長に会い小樽にも誘われたり」と元の同僚や教え子にたくさん東京で会った。大野純一学長は、デーゲン教師赴任の少し前に卒業しているから学んでいないが、東京高商専攻部を終えた後、同僚となる。最後に山中氏は、デーゲン教師との再会を望んで擲筆している(山中晴雄(昭和二年卒)「デーゲン教授の想出」『小樽商大緑丘会報』第三十六号一九七三年六月一日)。「緑丘の生活」には、丘をおりても続きがある。

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE

緑丘祭&緑宵祭

